

優秀賞

橋本 望美 (はしもと のぞみ) みなみ野小中 (みなみ野中) 2年生

作品名: 心の中に“生きる”もの

図 書: 夏の庭

最近「高齢化社会」という言葉をよく耳にする。日本の平均寿命は世界でもトップだ。これはとても喜ばしいことだが、その一方で誰にも看取られず独りで亡くなる人もいる。

この本を読んで私は、祖母が亡くなり一人暮らしになった祖父のことを思った…。私の祖母が亡くなったのは去年の十月。七十八歳とまだ若く誰よりも健康に気を配っていた元気な祖母だったので本当に突然のことだったが祖母は家族に見守られて安心して最期を迎えることができた。

あらすじは少年達が「死んだらどうなるのだろう」という好奇心を抱き、一人暮らしの老人の死を見ようと観察し始める。一方、おじいさんは少年達が来るのを楽しみに待つようになる。それまで生けるしかばねのような暮らしをしていたおじいさんは少年達とふれ合ううちに元気になっていった。あんなに無気力だったおじいさんが戦争の体験談や北海道に住んでいた時のこと、花火職人だったことなど自分のことを話してくれるようになったのだ。おじいさんは少年達と関わりをもつことで、生きる力が生まれたのだろう。そしていつの間にか友情のようなものが生まれた。しかし、おじいさんの死は突然訪れる。私も祖母の時にあまり実感がわかず、理解できず、今にも生き返るんじゃないかと思っていた。だから少年達がおじいさんの死を受け入れられない気持ちがよく分かる。私は人間の死について今まで真剣に考えたことがなかった。たぶん、心のどこかで死はとても悲しく不吉なものだと思いきや思えなくなかったのだと思う。でも、初めて身近な人の死を体験し、この本を読んで「死ぬ」とことと「生きる」ということを深く考えさせられた。

おじいさんの、少年達と一緒に生きた時間はそれまでの人生のほんの一部だが、忘れかけていた生きる喜びを十分に感じ、少年達との楽しい思い出をかみしめながら死を迎えられたから寂しくはなかったのかもしれない。私はこの本を読んで「生きる」ということは、息をしている、心臓が動いているというだけではなく人との

関わりの中で生まれる喜びや悲しみや楽しみ、時には怒りなどの感情が生まれ、それを感じていくことなのではないかと思うようになった。逆に「死ぬ」ということは心臓がとまる、存在がなくなること…。確かにそうだが喜ぶことや悲しいと感じることもなく人との関わりがなくなることが寂しすぎて命と同じくらいに大切なものを失ってしまうことだと思う。

人はいつかは必ず死ぬ。だが、決して失われないものもある。その人が残した思い出やその人の想いは決して消えたりしない。たとえ体がなくなっても、その人から教わったいろいろな知識やものの考え方、一緒に過ごした思い出などは、その人と関わった人達の心の中にずっとずっと生き続ける。人は死んでも何もかもが消えてなくなってしまうわけではない。しっかり生きた証は必ず誰かの心に大事にしまってあるはずだから。私も祖母と一緒にいった旅行での楽しい思い出や祖母がかけてくれた優しい言葉がいろいろな場面で思い出されるから。

私は「あの世に知り合いがいるってすごく心強い」「もしかすると歳をとることは楽しいことなのかもしれない」という少年達の言葉に同感した。歳をとるということはいろいろなことを経験してその分思い出も増えていく。また、あの世に知り合いがいるというのはなぜか安心感があり大丈夫と思えるものだ。

人生に終わりは必ず訪れる。死ぬのがこわい、どこに行ってしまうのか…など不安に思うこともある。でも、終わりのことなんて考えても仕方ないし何か変わる訳でもない。それなら、今を精一杯、楽しんで生きればいい。終わりがくれる「今」を大切に生きればきっと思い残すことなく、いい人生だったと思えるのだろう。少年達がおじいさんに包丁の使い方、ペンキのぬり方、庭の作り方、戦争の悲惨さ、そしてものの考え方などたくさんのことを教わったように、お年寄りはいろいろな経験をしてきているからこそ言えることや教わるものがたくさんある。

「夏の庭」は私に今を大切にすること、一緒に生きている家族や仲間感謝すること、人と関わることに積極的になるのが大切だということ、そして「生きる」ということは思っている以上に素晴らしいことを教えてくれた。そこで、今の高齢化社会で中学生の私に何ができるだろうか。少年達がおじいさんと出会い死を経験して成長していったように私も地域のお年寄りと交流したり、一人になってしまった祖父が寂しい思いをしないように私が祖父の生きる力になることはできる。そのためにも大切な仲間と一緒に勉強も部活も頑張っ、一日一日を全力で充実した中学校生活を過ごしていきたい。